

巻頭言 北海道における雪とのつきあい方

山田 亮 (北海道教育大学岩見沢校)

師走に入り、日本海側を中心に雪が降り続き、本格的なウィンタースポーツのシーズンとなりました。北海道では、山間部で順調に降雪があり、各スキー場は11月中旬より順次オープンし、12月からはパウダースノーを満喫するために、多くのスキーヤーやスノーボーダーが足を運んでいます。その光景は北海道なら当たり前のようにみえるかもしれませんが、2、3年前までの数年間、札幌市内のスキー場ではオープンが年明けまで延期されるほど深刻な雪不足に悩まされていたことを思い出します。ひょっとしたらこれからますます雪が降らなくなるのではと心配していた頃がとても懐かしいです。

私が勤務する大学がある岩見沢市は、昨シーズン、観測史上最深の194cmの大雪に見舞われ、北海道知事からの災害派遣要請を受けた陸上自衛隊が市街地の除雪・排雪のために出動する程の事態となりました。また、今シーズンは札幌市で、12月18日現在、最深積雪が87cmを観測し、12月の積雪としては観測史上第4位の深さ(平年の約4倍)となり、今後、積雪記録を更新するのではないかと予感しています。現在札幌市内は除雪された雪が2.5~3mほどの山になっていて、主要道路では2車線のうちの1車線を雪山が塞いでいるので、慢性的に交通渋滞が起きている。また、各家庭では除雪した雪の置き場の許容量が越えてしまいました。そこで札幌市は例年よりも1ヶ月早く、排雪の作業を開始しました。さらに、11月下旬に起きた登別市・室蘭市の大雪・暴風雪による大規模停電という災害も記憶に新しく、これまで以上に今シーズンは、冬という季節、雪という自然現象の厳しさや恐ろしさをひしひしと感じているところです。

さて、そのような状況にあっても、雪という存在はアウトドアで活動する私にとってはやはり必要な

ものだと思っています。雪が降る度に、家の前を除雪し、雪を積み上げて山を作ります。その雪山で私の5歳と2歳の息子達は、毎日のように登っては滑っての繰り返しで遊んでいます。たまに、近くの公園に息子を連れて行って、そこにある築山(札幌の公園には必ずあります)でスキーの練習をしたり、ソリ滑りをしたりしています。

勤務先の大学で行っている授業や活動でも、雪とは日常から楽しくおつきあいをしています。学生達は大学の裏側にあるスキー場のシーズン券を購入し、空きコマの時間や放課後にはスキー、スノーボードの練習に励んでいます。なかには準指導員の資格をとって、インストラクターのアルバイトをしている学生もいます。授業に関しても一週間の時間割上、大学の敷地内で雪像づくり、ソリ滑り、スノーシューハイク、雪合戦、スノークラフトなどの活動と企画・指導法の実習を行っています。また、陸上競技場を、スノーモービルを使って圧雪して、クロスカントリースキーのコースを作って日頃から学生達が練習できるように環境を整えています。一方、大学を離れて授業を行うこともあります。例えば、十勝岳連峰においてバックカントリースキーの集中授業も行っています。しかし、実習に行く前に雪上でのビバークや食事づくりの仕方、雪崩の知識と捜索法など、大学において実習が可能なテーマに関しては、大学で授業を行っています。

北海道は都市部に住んでいても生活の中に自然が入り込んできます。特に雪とはうまくつきあいたいものです。この原稿を書き上げて、これから帰宅しようと思いますが、おそらく朝から降り続いた雪のせいで、駐車場に置いている車は雪に埋もれているはず。長靴を履いて、ゴム手袋を装着し、スコップを持って研究室を出ようと思います。

研究の視点 やんばるの森ガイドツアーから野外教育を考える

大石 康彦 (森林総合研究所多摩森林科学園)

【やんばるの森ガイドツアー】

2012年7月の沖縄大会エクスカージョンで、沖縄県北部のやんばるの森を訪れました。日本環境教育学会協力によるエクスカージョンは、世界自然遺産や国立公園の候補地やんばるの環境教育活動の拠点、国頭村環境教育センター「やんばる学びの森」で行われ、2日間にわたる昼夜のガイドツアーを中心とするものでした。我が国における環境教育活動の、一つの典型といえるこのツアーをふり返りながら、野外教育について改めて考えてみました。



ハブ

【野外教育活動と野生生物】

1日目のナイトハイクで訪れた夜のやんばるの森は、野生生物が発する無数の音で満ちていました。暗闇の中でもすぐそこに何かがある、ライトの光の先には、ガラスヒバア、シリケンイモリ、ヤンバルヤマナメクジ、イシカワガエル、ハブなどが次々と姿をあらわしました。一般に野外の環境では、急峻な地形、厳しい気象条件などが心身を覚醒させ、美しい風景や、心地よい風が心身を癒してくれます。このような野外

の特質は、野外教育活動の様々な場面に活かされています。一方で、野生生物が野外教育活動に活かされている例は、あまり多くないように思います。やんばるの森のナイトハイクでは、野生生物に向けたガイドのまなざしが、観察対象というよりも、時空を共有する仲間に対する温かいものを感じられました。野外教育活動における野生生物の意味をとらえなおしてみたいと考えました。

【野外教育活動と歴史・文化】

2日目のガイドウォークでは、溪流沿いのトレイルを歩きながら、ガイドから自然の解説から地域の歴史や文化まで幅広い話をうかがいました。森の植物を住まいづくりや魚捕りなどに利用してきた地域の生活文化の話は、自然の中で生活を遂行するキャンプ



溪流沿いのトレイルを進む

の活動に通じるように感じました。また、マツの群落は人が切り拓いたあとであるなど、自然の姿から過去の歴史を読み取る話しも興味深いものでした。奥深い自然に見えるやんばるの森にも、自然と人の関わりが

刻まれていることに気づかされました。日本には前人未踏の地は無いと言われるように、やんばるの森に限らず国内どこへ行っても、その地域の自然と人の関わりの歴史や文化があります。野外教育活動における地域の歴史・文化の意味をとらえなおしてみたいと考えました。

【野外教育活動と自然の背景にある問題】

1日目のナイトハイクの後、地元の写真家久高氏の好意で、ヤンバルクイナの観察に出かけました。深夜の車中から、道路沿いの樹上で休むヤンバルクイナを見ることができました。現場の話からは、希少生物だからと手厚く保護すればよいわけではないのだとわかりました。2日目のガイドウォークでは、森の中に散在する米軍サバイバル訓練の塹壕跡を見ることができました。やんばるの森でソロキャンプをするのは、子どもではなく兵士なのだとわかりました。やんばるの森にある問題は他と比べてとりわけ複雑ですが、どんな地域でも大なり小なり環境と社会のあり方に関わる問題をかかえていると思います。野外教育活動における自然の背景にある問題の意味をとらえなおしてみたいと考えました。

【野外教育活動をおさえるスケール】

学校における授業は、授業の進め方、指導者がどう発言し働きかけ、学習者がどう受けとめて行動するかなど、予定した中で進められます。一方、野外での活動の場合は、変化に富んだ自然の中で、長時間にわたることなどから、全てを詳細な予定に沿って進めるのは難しいことです。やんばるの森ガイドツアーでも、ガイドは決まったコースで定番の話題を提供しているように見えますが、予想外の生物が現れたり、参加者が何かを発見したりすることも少なくありませんでした。ガイドはそのような出来事を、あたかも予定していたかのように自然に受けとめ、活動の中に編み込んでいました。

野外教育の研究では、キャンプあるいは登山といった具合に活動全体を丸ごととらえることが多いように思います。しかし、活動全体を一本の映画になぞらえれば、そこには全体のストーリー、ストーリーを構成するいくつかのエピソード、エピソードを構成する数多くのシーンがあります。野外教育活動が参加者に生きる力を与える時、それは活動全体のストーリーから与えられるのでしょうか、あるいは一つのエピソードからでしょうか、それともあるシーンからでしょうか。野外教育活動におけるストーリー、エピソード、シーンの、それぞれの意味をとらえなおしてみたいと考えました。

日本野外教育学会 中部甲信越ブロック会議報告

時安 和行（至学館大学）

平成24年3月20日（火、祝）に開催された第1回中部甲信越ブロック会議について、次のとおり報告します。

中部甲信越ブロックには約70名の会員が所属しておりますが、日本アルプスの山々を間に挟み、行き来にも時間がかかるという地理的条件があり、今まで一堂に会する機会を逸してきましたが、ブロック選出の川村協平理事（山梨大学）、平野吉直理事（信州大学）、平田裕一理事（至学館大学）の企画により、第1回中部甲信越ブロック会議をエリアの中央部の山梨大学を会場に開催する運びとなりました。

ブロック会議では、山梨県環境科学研究所副所長の永井正則氏を招き「野外活動時の生体反応計測について」と題する講義と機器の実演が行われ、講義終了後にはブロック会議が開催されました。参加者は、会員8名、非会員4名の合計12名、富山県、長野県、愛知県、山梨県からの参加がありました。

講師の永井副所長は、環境生理学研究室に所属し、野外における活動時の生態反応の研究を数多くなされ、今回は、「人間のストレスが軽減するシステムについて」、「中学生のオリエンテーリング活動時の生体反応」、「中高年のトレッキングと血圧降下」、「自然からの香りとストレス軽減」などについて、綿密な実験計画による人間の生理的変化の研究について詳しく説明していただきました。

参加者から、野外という気候や地形など自然環境に左右される状況での個人の心理特性はどのように考えたら良いか、オリエンテーリングという運動特性が実験に左右するのかなど具体的な質問もなされ、自分自身としては、野外における生理的データを取る上での難しい点や実験から見える今後の課題や限界などについて率直に聞くことができ大変参考になりました。また、講義の後に同行された研究所の遠藤助手から持参していただいた最新の記録機器を実際に体験する時間をいただき、手軽に心電図、心拍などを測定し、すぐにコンピューターに保存できる機器に対して、参加者から使用時間や金額など具体的な質問がなされました。

引き続き行われたブロック会議では、それぞれの会員が考えるブロック活性化について意見を出し合い、その中でも今回参加者が少なかったことが課題として挙げられました。日本野外教育学会に参加したくても時期的なことや開催地が遠方であるなどの問題で参加できない会員のためにもこのようなブロック会議は重要であることが共有され、地理的に難しい条件はあるが毎年開催すること、会議の案内を学会時に連絡できるように早めに進めることとなりました。今後確定次第ニュースレターやホームページで会員の皆さんにお伝えする他、日本野外教育学会時にブロック委員に広報していく予定です。

新入会員（団体）紹介

NPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶ

松原 條一

NPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶは北海道登別市を拠点に、四季を通じて、入門者から熟練者向けまでの自然体験活動についていろいろな楽しみ方を提供し、五感を駆使した体験活動を展開しています。子ども向けプログラムから、大人まで、様々な皆様に自然の中での「気づき」を促進しています。また、人材育成事業、子育て支援事業などを展開する中で、様々な「社会的気づき」を促進しています。その結果、利用者がボランティアとして関わり、そして社会的目覚めの中からプログラム提供者としてモモンガくらぶの中核に育っていきます。多くのボランティアが関わり、成長し、その皆様が「NPO 法人モモンガくらぶ」を創りあげています。私たちの主なフィールドは、指定管理者として委託を受け管理・運営する「登別市ネイチャーセンターふおれすと鉦山」（以下、ふおれすと鉦山）が中心です。



ふおれすと鉦山のある地域は、かつては幌別鉦山として栄えたところでもあります。その頃は2000名ほどの居住者がいて、その頃の面影を随所に見せながら、傷んでいた自然が再生中のところです。

周辺には自然素材はあふれんばかりです。この自然素材を活用して「ヒントと答え」を見だし、地域の皆様に楽しんでいただいています。これまで年

間2万人を超える皆様にご利用いただいておりますが、その皆様のご要望にお応えしています。

いま、NPO 法人モモンガくらぶはいろいろな責任と役割が与えられていると考えています。それは、人と人のつながり、森とまちのつながりを進めていくことで、地域で必要とされている人材の育成と活用を進めていくことです。自然を素材にした指導者養成は知識と技術の習得をめざし、地域のガイドをはじめ自然ガイドを実践しています。ボランティア意識の高い人たちのモチベーション維持のために、チーム制を導入し、自主的チーム活動、管理を押し進めています。チームはふおれすと鉦山の活動サポートから自主活動まで、幅広く活動を展開しています。

現在行われている指導者養成講座では主に専門知識、技術が主体ですが、これに加え、人間形成から組織マネジメントまでを習得できる野外教育に関するプロフェッショナル指導者の育成「北海道アウトドアプロデューススクール (HOPE)」を、平成25年4月よりスタートさせることになりました。これまでの実績とノウハウをもって「メシが食える」実務者、運営者のための場を創造していくお手伝いをしていきます。

北海道アウトドアプロデューススクール (HOPE) 募集要項について、下記よりダウンロードが可能です。

<http://npo-momonga.org/2012hope/huyusupe.html>

【団体連絡先】

NPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶ
登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉦山」
<http://npo-momonga.org/>

〒059-0021 北海道登別市鉦山町 8-3

TEL 0143-85-2569 FAX 0143-81-5808

E-mail momonga@npo-momonga.org

理事長 松原 條一 事務局長 吉元 美穂

図書紹介

「保育と環境」

矢野 正 (大阪女子短期大学)

本書は、保育・教職志望学生対象の入門書であり、保育内容「環境」領域を扱ったテキストとして作成・構成されている。保育に関する基礎理論や実践知についてわかりやすい記述となっている。

現代は、さまざまな人や物とのかかわりを通した多様な体験を子どもに提供するとともに、心身の調和のとれた発育発達を保障すること、多様な自然体験や生活体験が可能となる環境整備、持続可能性への配慮といった観点が重要になっている。保育に携わる者には、子どもの生きる力を育むことに加え、子どもを取り巻くさまざまな環境を調整する能力が求められる。ここで、保育の専門性とは、子どもが身のまわりのさまざまな環境に触れて、好奇心や探究心をもってかかわり、遊びや生活を広げ深めていく経験について考えることである。したがって、保育現場の子どもたちの実際の姿を捉える保育観（環境観）とでもいべき感覚や環境の応答性について意識できるようになることが受講学生の学びの前提である。

本書の執筆には、現在、教職や保育者養成校で実践にかかわりながら研究に携わっていたり、現場の第一線で活躍されている教員が担当している。保育観を広げ、深められるように、保育実践事例や写真なども多く取り入れるとともに、各章ごとには重要語句やまとめが示され、領域「環境」の基本について簡潔でわかりやすい記述を心がけている。

本書は、全13章から構成される。第1章では保育の基本と領域「環境」について、第2・3章では好奇心と探究心、思考力の芽生えを育む指導について、第4・5章では身近な生活の中でのかかわりとその指導、第6～9章では人的環境、物的環境、自然環境、子どもの遊びについてそれぞれ解説されている。さ

らに、子どもの環境をめぐる今日的課題について、安全教育(第10章)、小学校教育との接続(第12章)について取り上げている。また第11章では、学生皆さんにはなかなか理解しにくい実際の指導計画の作成方法と評価について解説している。また最後の第13章では実践編として、「環境」をめぐる子ども理解や保育者の援助を考えていただくため、可能な限り保育現場での事例を紹介しようと試みている。

本書を通して、受講者の皆さんが保育学や教育学の知見に基づきながら「環境」の基本を理解するとともに、すばらしい保育の世界や保育者という仕事の魅力について感じていただきたい。そして本書が保育に携わる多くの方々に広く活用され、子どもたちの健やかな成長につながることを願っている。

「保育と環境」 矢野正・小川圭子 編著

嗟峨野書院 2011年4月

ISBN 978-4-7823-0515-7

目次

保育の基本と領域「環境」
子どもの発達と保育内容「環境」
好奇心・探究心を豊かに育む
思考力の芽生えを育む指導
身近な生活の中でのかかわりと指導
環境を生活に取り入れる指導
人的環境としての保育者・友だち
物的環境としての園具・遊具・教材
自然環境としての動植物
安全教育と保育環境のデザイン
保育計画と指導
小学校教育との連携
保育内容「環境」の実践事例